

# 働きもののネズミ



くろちまき



ある森に  
1匹の 働きもののネズミが いました。

そのネズミは とても働きもので  
森が とても大好きでした。



しかし・・・

その森は  
火事でなくなって しまったのです。

ネズミは  
こころのそこから 悲しみました。

たくさん たくさん 泣きました。



そして 決めたのです。

なくなってしまったのなら  
自分で つくろうと・・・。



次の日から ネズミは種を まきはじめました。  
ちいさな苗木も 植えました。

毎日 毎日 風が吹こうとも  
雨が 降ろうとも  
休むことなく 木を植えつづけたのです。



ある時 仲間のネズミは 言いました。  
「無理だよ。1匹の ネズミに森なんて つくれるわけない。」

でも ネズミは聞こうとしません。  
仲間の ネズミが森を 去ろうとも  
変わらずに 毎日 毎日 がんばりつづけました。

まいた種が 芽を出し 植えた木々が 大きくなりはじめたころ  
働きもののネズミは すっかり有名になり  
そのウワサは やがて  
街に 住む 王様ネズミの耳へと 入ったのです。



働きもののネズミのもとへと やってきた王様ネズミは  
こう言いました。



「この 場所にあった森は もともとワシが治めていた森だ。  
だから お前の育てたこの森も ワシのものだ。  
ワシに 返すがいい。」



すると 働きもののネズミは 意外なことを  
言いました。

「わかりました。

森は おゆずりします。次の春が来たら  
すぐにでも わたしは 出ていきます。」

そう 言うと 本当に  
次の春に 出ていってしまったのです。



それを 見ていた 1匹の仲間のネズミが  
たずねました。



「何で あなたが 出ていくの？  
1人で がんばったのは あなたなのに。」

すると 働きもののネズミは 答えます。

「わたしは やりたいと思ったことを やっただけです。

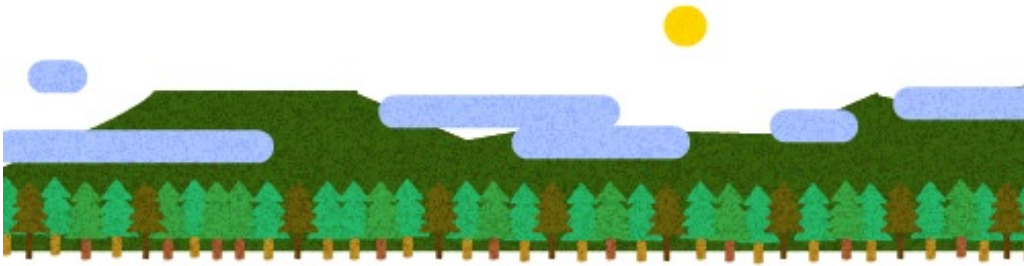
それに 1人でも  
ずっとがんばっていれば きっと誰か  
それを 認めてくれる人はいます。  
今の あなたのように。

わたしは それが  
とても うれしいのです・・・。」

森を ひとり占めしようとした 王様は  
働きもののネズミがつくった森を見て おどろき、そして  
後悔しました。



働きもののネズミのつくった森は すでに  
昔の森を おおきく上回る 巨大な森に  
なっていたのです。



自分が はずかしくなった王様は  
ほかのネズミや動物たちに 森を 開放し  
みんなで 暮らすことにしました。



でも そこに 働きものの  
ネズミの 姿はありません。

きっと・・・  
今も 働きもののネズミは 別の場所で  
一生懸命 がんばっているのだから。

おしまい。

